

成都杜甫草堂博物館第二届全国碩博論壇に参加して

*シンポの日程→「論壇議程」

8月7日（水）

フライトは、四川航空。往路は 3U8088、関空発 20:20、成都着 23:55。復路は 3U8087、成都発 14:25、関空着 19:30。

成都国際双流机场到着は 12 時を過ぎた。12 時 45 分出口に。

卞超さん（「杜甫研究学刊」編輯委員）が出迎えに。博物館の車で、成都天辰楼賓館へ。卞超さんは、四川大学を卒業、大学院も。明清の白話を研究しているらしい。ホテルへは 30 分ほどかかった。

部屋はダブル、3808。とにかくシャワーを浴びて、2 時に寝た。

8月8日（木）

8 時に下におりると、張月さん（編輯委員）が来ていた。一緒に朝食をとってくれた。

朝食の後、部屋に来てもらい、ネットが通じるようにした。しかし、日本とのメールは通じない。この状況は、ずっと変わらず。（送信フォルダに残っていたが、実際には送れていた。不思議？）。

10 時に、卞超さん来る。昼食前にどこかに連れていってくれる予定だったようだが、休息を優先して、また 11 時に来ることに。

11 時に来たら、部屋をシングルに替えた。8308 からシングルの 8303 へ移動。

タクシーで 11 時半頃に、陳麻婆豆腐店に着いた。道路をはさんで浣花溪公園の向かい。今の住所は、百度百科によると、成都市青羊区西玉龙街 197 号。1990 年発行の『成都旅遊指南』（四川人民出版社）によれば、成都解放路二段 33 号。



これは、驚いた。嬉しかった。帝塚山学院大学の短期研修で、1994 年夏、蘇州大学での勉強の後、三峡川下りをした。成都はその出発地。この時、学生を連れていったのだ。

帰ってから記念文集を見ると、それは9月11日（日）の夕食。あの時は、そんなに大きな店ではなかった。移転して、規模もこんなに大きくなったのだ。



一階。盛況だ。

昼食には、学刊の「杜甫研究学刊」の編集部の人たちが来てくれた。彭燕さん(編輯主任)を始め、朱泓薪さんも。朱泓薪さんは、8日の講座の発言稿や、飛行機のチケットのことで、ずっとメールで連絡を取ってくれた人。この日付けで、博物館の別の部署に移ったとか。



李霞鋒副館長・張宏・陳寧諸氏



張宏・陳寧・張月・賈兵諸氏



劉曉鳳・朱泓薪・卞超・彭燕諸氏



コースメニュー。これは安いもの。この上は、1088 元・1268 元



担々麵。あっさりした味だった。

昼寝を少し。卞超さん、3時に迎えに来てくれた。杜甫草堂の正門前には、3時15分頃着。正門左に、私の写真入りの講座のでっかい看板があつて驚いた。



講座のテーマは「杜甫与白居易——兼論其独善和共生思想」



『杜甫伝』（1952）の著者馮至先生の書かれた記念碑。

講座は3時半に開始。会場は蔵経楼。参加は50数名。100人以上申し込みがあったのだが、会場の収容数に制限があり、申込書に年齢や職業などを書く欄もあったようで、なるだけ講演を理解しやすいような人にしぼったという。わかい人が多かった。四川大学の院生が相当選ばれていた模様。



藏經樓

講演のテーマは「杜甫与白居易—兼論其“独善”和共生思想(杜甫と白居易—その「独善」と共生思想について)」。これは3月復旦大学で講義した「杜甫与白居易」に副題をつけ、手を加えたもの。もともと「杜甫と白居易の詩における擬人法」(仮題)というテーマで、20分くらいの報告を考えていたが、6月に入って担当者から具体的な連絡があり、論壇の前日の8日に「文化名人講座」というものを開催する、1時間以上しゃべってくれという。しかも四川省の招聘認可を得るために数日中に完全原稿が必要だと。そこで相談してこのテーマにしたのである。関心のある方は、私のHP「下定雅弘の中国文学の回廊」「1研究」「杜甫」をご覧ください。幸いである。

講演は、3時半～4時50分、上篇「内容—その“独善”の表現」。休憩10分をはさんで、5時～5時20分、下篇「創作技法」。下編はごくかいつまんで話した。全部で、1時間40分くらい。



会場の様子

講演の後、30 分ほど、質疑応答。

質問は次のようなものがあつた。回答の要点も記す。

1、現実主義と、表現の工夫—写実・比喻・誇張・擬人化—との関係。

下篇「創作技法」の「二、逼真的表現—写実・比喻・誇張・擬人化—」の章の初めに「杜甫は偉大な現実主義詩人といわれている」といっており、この現実主義と「比喻・誇張・擬人化」等の表現の工夫との関連を問うたもの。

回答：これへの答えとしては杜甫の詩に「語不驚人死不休(語人を驚かさずんば死すとも休まず)」とあるのを挙げるのがいい。現実を表現するのに、杜甫は眼前に見ているように、自分の耳で聞いているように迫真の表現ができなければ、死んでも死にきれないという。この真実に迫るには、写実・比喻・誇張・擬人化など様々な技法を命をかけて追究した。

2、兼済、独善と共生思想との共通点と異なる点。

私の話のサブテーマは「その“独善”と共生思想」である。帰国後、気づいたのだが、私が博物館の編集部へ送った発言稿には、要所要所に注を付けたが、これが当日配布のプリントでは、本文のみが印刷されていた。「共生思想」を、私は自分の話の根本にある考えとして、この語が出て来たところで、強調し注を読んだのだが、それだけで

は、はっきりしなかったのだと思う

「共生思想」についての注を、ここに挙げておく。

“共生”本来は19世紀後期にドイツ生態学界で使われた学術用語、意味は“不同種類の生物が共同生活”。その後生態学・進化論の発展で、“共生”の概念は大きく変化した。加えて、社会学・政治学・哲学等の学者が“共生”の議論に参加、この概念の内容は複雑さを増し、多くの異なる立場の考えが見えるようになった。日本でこの概念を提唱した人物として、比較的名なものは建築家の黒川紀章である。しかし彼の理論には大きな問題がある。「共生」の基本概念として私が主に依拠しているのは哲学者尾関周二の理論(例えば『現代コミュニケーションと共生・共同』、青木書店、1995)である。私の話は杜甫と白居易の作品の具体的な内容に即して、彼らの共生思想に考察を加えるものである。

「共生」は本来19世紀後期にドイツの生態学で使われた学術用語であり、「異なる種類の生物が共存して生活する」の意である。その後、生態学・進化論の発展とともに、「共生」の概念には大きな変化があった。くわえて、社会学・政治学・哲学等の学者が「共生」の議論に参加して、この概念の内容は複雑さを増し、多くの異なる立場の考えを見るようになった。日本でこの概念を提唱した人物として、比較的名なものは建築家の黒川紀章である。しかし彼の理論には大きな問題がある。「共生」の基本概念として私が主に依拠しているのは哲学者尾関周二の理論(例えば『現代コミュニケーションと共生・共同』、青木書店、1995)である。私の話は杜甫と白居易の作品の具体的な内容に即して、彼らの共生思想に考察を加えるものである。

回答：兼済は明らかに共生思想です。独善は、白居易の意味では、プライベートの快適・歓楽の意だが、白居易は自己を愛し大切にすると同時に、自分と同じように、他の人は無論、動物も植物も、そして爐(いろり)のような無機物にさえ、深い関心と愛情を抱き表現した。杜甫も同じ。彼らの独善には、現代でいう「共生思想」が根底にある。そういう関係です。

3、「細」の意味。

これは、「飲酒的喜悦(飲酒の喜び)」の節で引用している、杜甫の詩「敝廬興を遣り巖公に寄せ奉る」0805に「把酒宜深酌、題詩好細論(酒を把らば宜しく深く酌むべし、詩を題して好しく細かに論ぜん)」とあり、「悶を遣りて戯れに路十九曹長に寄す」1074に「晩節漸于詩律細、誰家数去酒杯寛(晩節漸く詩律に於いて細やかなり、誰が家にか数ゝ去きて酒杯寛かならん)」とある、この二つの「細」の意味を問うたもの。「細雨」「微細」等の「細」とはちがうので、この質問が出たのだろう。

回答：創作の工夫について仔細に論じ、仔細に会得するの意。例えば杜甫が十五歳になった次男が詩作に強い関心を持つようになってきたのに対して、「又た宗武に示す」で論語や『文選』のよく知られた典故を使って、宗武に詩作の初歩の工夫を教えています。詩作は精進を積むほどに、その理が深く緻密になっていく。それを「細」の語を用いて表現しています。

4、兼済は人民が対象、共生は、人・動物・植物の全部を含む。

これは、論壇で発表する博士研究生が、上の「兼済・独善と共生思想」の、共通点・

異なる点の議論を受けて、「兼濟」と「共生思想」の異同を整理したもの。兼濟の範囲は、人に限定されないかもしれない。柳宗元が「輔時及物(時を輔け物に及ぼす)」、天子の治世を輔佐し、恵みを万物に及ぼす、という時、「物」は「人(民)」だけではないかもしれない、と一瞬思ったが、下のように単純に答えた。

回答：そうですね。その通りです。

5、「独善」の成立について。他の詩人にも同類の現象は見えるか。

講座終了後。質問者は、四川大学の研究生だと思う。

回答：実にいい質問。白居易の前では、李白にも独善の実質が見えるし、同時代の劉禹錫にも確認できる。問題は、この「独善」が白居易によって、元和十年の冬、左遷されている江州で考えられたということだ。この背景には皇帝権力と科挙官僚との関係の成熟ということがある。探究する価値の極めて高い重要な問題。ぜひ研究してください。

質疑応答が終わったのは、5時45分頃か。たくさんの方が、プリントにサインを求めてくださり、写真を一緒にとってほしいと言ってきてくれた。初めて「明星」(スター)になった気分。当日、参加の皆さんに改めて、お礼をいいたい。

夕食は、天辰楼の南楼(二楼)のレストランで。



向かいに坐っているのは、左から賈兵・卞超・張宏・張月の編輯委員諸氏



緑豆春雨 辛くない。日本で食べるのと同じ味だった。



主賓(下定)がこの「福」を開いて、みなさんに「福」を分ける。



「福」の中身。上は豚。下に海鮮やきのこが入っていた。

部屋にもどった後、ホテル近くを散策。目的は当地の白酒とつまみを買って、ちょっと嗜むこと。



夜の街 1



夜の街 2



酒とつまみを買ったコンビニ

写真を撮りながらぶらぶらと歩いた後、コンビニで瀘州老窖(150 元ほど)を買い、つまみは、タケノコの山椒漬と、「酒鬼豆腐」という、多分豆腐干を煮こんだもの、それ

にカップの担々麺を買った。



タケノコの山椒漬



豆腐干



老成都担々麵

カップ麺は、部屋にもどってから熱湯を注いで少しだけ味見して、ほとんど捨てた（食べ過ぎてはいけないので、特にうまくなかった）。タケノコの漬物と豆腐干をつまみにしながら、ちびちびと白酒を飲み、いい気持ちになって、11 時頃に就寝。

8月9日（金）

前夜は11時（中国時間、日本では12時）頃に就寝。

7時に朝食に行ったが、開餐は7時半から。部屋にもどり、少し休むつもりで寝ころんだら、眠ってしまい、7時45分頃、張月さんがドアを叩き、「先生、朝食」というので起こされた。慌てて、朝食に行き、もどってきて大急ぎで、シンポ参加用の服装に着替え、資料いろいろをバッグに入れてロビーへ。卞超さん、待っていた。

シンポは昨日講演した蔵経楼で。開会挨拶は8時半から。博物館副館長方偉老師がまず開幕の挨拶。次に、私と劉明華教授が挨拶。



記念撮影の前。左から、潘珠閑教授・周裕錯教授・下定・徐希平教授

9 時 過 ぎ 、 集 合 写 真 。



前列左から、潘珠閑教授・徐希平教授・方偉副館長・下定・劉明華教授・周裕鏊教授・王紅教授。

記念撮影の後、お茶菓子休憩。

院生たちの報告は、午前5人。午後5人。

午前。第一場、9：20～10：20。

司会は、王燕飛(西華大学文学与新聞伝播学院副教授)。



第一場司会：王燕飛副教授

発表は、程瑜(西南大学博士研究生)。批評者は、方銳教授(四川師範大学文学院)。



程瑜同学

テーマは「「秋興八首」的古今次韻現象(杜甫「秋興八首」の古今次韻の現象)」。「秋興八首」0985－0992 は、史上次韻された数量が最も多い連作の詩である。それは現代にも続いており、日本朝鮮にも影響を与えた。この作の多くの次韻詩が、乱世における文人の杜甫への心理的共感を現している、詩人が次韻する時に自己の至らなさを意識し詩作の技量を高めることができる、詩作の才能技量を競い合うことができる。思想的共感・技芸の学習・詩才の競争、この三者が、「秋興八首」が一貫して次韻されてきた原動力である。



方鋭教授。笑っているが厳しい批評だった。

第一場二人目は、丁震寰同学(広西大学碩士研究生)。テーマは「“蜀主窺吳幸三峽”(蜀主吳を窺いて三峽に幸す)解」。この句は、「詠懷古跡五首」其四 0996 の冒頭の一句。『杜甫全詩訳注』は「蜀の先主(劉備)は吳を討とうと三峽にまで軍をお進めになり」と訳している。この一句について、清の顧炎武・屈大均が「漢帝征吳」に改めるべきだとしたことを取り上げ、その背景に、漢を継ぐ正統が蜀だとの説が南宋以後起こり、明朝には蜀漢正統論が曹魏正統論に取って代わっていた等のことを述べるもの。

批評者は、徐希平教授(写真は後掲)。



丁震寰同学

第二場、10：30～12：00。

発表者、一人目は、李江才同学(南京師範大学碩士研究生)。



李江才同学(左)

テーマは「論山谷詞之学杜(山谷の詞が杜甫に学んでいることを論ずる)」。山谷は黄庭堅の号。黄庭堅が詩のみならず、「詞」についても、周邦彦(北宋の詞人)や辛棄疾(南宋の詞人)に劣らず、杜甫に学んでいることを論ずるもの。

批評者は、潘殊閑教授(西華大学図書館教授)。



潘殊閑教授

発表者、二人目は、劉歆同学(四川大学博士研究生)。



劉歆同学。右で pc の操作を助けるのは、編輯委員の陳寧老師。

テーマは「宋代杜詩異文校勘与經典文本的生成—以杜詩趙次公注為中心(宋代の杜詩の異文の校勘と經典的なテキストの生成—趙次公の注を中心に)」。趙次公の杜詩注の特徴を考察する論考。主観的には杜詩そのものの回帰しようとしながらも、先見(先入観)の影響を強く受けていると論じる。

評者は、劉明華教授(西南大学・中国杜甫研究会会長)。教授は、中国杜甫研究会会長。お会いするのは、昨年四月鞏義で開かれた「詩聖杜甫与中華詩学国際學術研討会」、八月、復旦大学で開かれた「唐代文学会」に続き 3 度目である。



劉明華教授

昼食は 12 時～14 時半。天辰楼の南側の第二楼のレストランで。

1 時過ぎ、北楼の部屋にもどり、1 時 50 分まで、30 分ほど昼寝。かなり疲労がとれてきた。卞超さんと、2 時 10 分頃、下で会う。今日も蒸し暑い。卞超さんによれば、昼の気温は 33 度ほど。湿度が高くて 80% くらいはあるとのこと。

第三場。14 : 30－15 : 30

司会は、王猛副教授(西南民族大学大学文学与新闻传播学院)



王猛副教授

一番目の発表者は、任喲奇同学(南京大学硕士研究生)。



任喲奇同学。ppt で画像を見せつつ発表。

テーマは「唐長沙窖瓷器題詩芸術分析与探源(唐長沙窖[洞穴]の磁器に書かれた詩の芸術性の分析と淵源の探究)」。長沙窖で発見された磁器には大量の唐代の民間で創作された佚詩があり、それには「疊字」(「日日」「处处」の類)・「重字体」(「春水春池満」の類)・「一与多」(「一別行万里」の類)、「套語」(「上有東流水、下有好山林」の類)が多く見られることを指摘し、これらが南朝の荊楚地区で行われた「西声」を継承するものであることを確認し、唐詩では白居易がこうした技法を活用していることを述べる。

評者は、王紅教授(四川大学文学与新聞学院)。



王紅教授

2 番目は、楊春萌同学(中国人民大学碩士研究生)。



楊春萌同学

テーマは「王禹偁対杜詩的接受及相關問題——解讀“子美集開詩世界”的三重語境(王禹偁における杜詩の受容と関連する問題—「子美集開詩世界」の三重のコンテキスト)」。該句は、王禹偁「日長簡仲咸」の三・四句に「子美集開詩世界、伯陽書見道根源」の上句。楊同学は、その意味する所を、三つのコンテキストの場に置いて考えるもの。一、錢鍾書を初めとして、「杜甫は詩の新たな領域を切り開いた」の意と捉えてきた。しかし、近年、陸徳海がいう。王禹偁は白詩をこそ身に体した白体詩人であり、杜甫への理解はそこまで到達していなかった。両句の意味は、「退屈だったが杜甫の集を開くと詩の世界に入れる、老子の書をひもとくと道の根源を味わえる」、なのだ。原詩の文脈からすれば錢鍾書の解は誤読だ。二、歴史語境：宋初にはまだ「崇杜」の風気は起こっていなかった。三、文本語境：王禹偁は白詩を師として尊崇していて、杜甫の詩の学び方は、質量ともに白居易には及ばない。四、研究語境：錢鍾書が『宋詩選注』を執筆した当時の政治情勢・審美傾向が、この句の誤解に影響している。

評者は、彭燕老師(成都杜甫草堂博物館副研究員)



彭燕老師

15：30－15：50 お茶休憩。

第四場。15：50－17：20。

一番目の発表者は、楊清瑞同学(北京師範大学碩士研究生)。



楊清瑞同学

テーマは「末句物我的隱与現—略論杜甫詠物五律的末句書写（末句の「物・我」の潜在と現出—杜甫の詠物五律の末句の表現について）」。論の要点は以下の通り。杜甫の詠物五律の末句の記述は表現対象の別に応じて二つの類型に分けることができる。一つは物が隠れ我が現れる、あるいは物・我がみな現れる末句であり、句中の表現対象は人を主として抒情または議論等主観的な情緒になっている。いま一つは物が現れ我が隠れる末句であり、句中の表現対象は物を主として物・景や事件等客観的な事物になっている。詠物五律の詩作は秦州時期・蜀中時期・夔州時期の三段階に分けられるが、前期から後期へと、「物現我隱」の末句の比率が増えていき、「物隱我現」の比率が減っていく。この末句の表現方式は、中晩唐の詠物五律の末句の表現方式に大きな影響を与えた。

評者は王猛副教授（西南民族大学文学与新聞傳播学院）：上掲。

二番目の発表者（最後の発表者）は、張思茗同学（復旦大学博士研究生）。彼女は、昨年10月に早稲田大学で開かれた「日本杜甫学会」に参加、「閬州隸属之變与杜甫閬州之行（閬州の所属の変化と杜甫の閬州行）」というテーマで発表している。今回の発表も、具体的な情勢の変化と杜詩の解釈とを結びつけたもの。



張思茗同学

テーマは「旧臣“朋党”与諫臣“忠義”—肅代之交杜甫憑吊陳子昂等人詩事發微」、旧臣「朋党」と諫臣「忠義」—肅宗皇帝の時代に杜甫が陳子昂等を詩中でしのび吊ったことについての聊かの考察。摘要にいう。「肅宗が玄宗の旧臣を排斥する情勢において、

杜甫は房琯を救うように諫言したことで朋党の汚名をかぶせられ、蜀に逃げるようになった。代宗が即位して以後、形成は変化し、杜甫は出仕を思うようになった。彼は「終古立忠義」の語でもって、陳子昂が無私の精神で諫言し、忠義を国に尽くしたことを称讃し、これによって自己の過去の汚名を正そうとし、また再び朝廷に帰りさくために理由を提示したのである。「終古立忠義」は、「陳拾遺故宅」0588の結句「終古忠義を立て、感遇遺篇有り」の上句。『杜甫全詩訳注』は「陳子昂殿は永遠に忠義の心を打ち立て、「感遇」と題する詩篇を後世に残されたのだ」。

評者は孫尚勇教授(四川大学文学与新聞学院)。



孫尚勇教授

【証書の贈呈】 17：20－17：30

発表と批評が全て終了した後、周裕鍔教授から10人の同学に発表が優秀であることを讃える証書が贈呈された。順位はつけていない。



周華同学、周裕锴教授から荣誉证书を贈呈される。



張思茗同学、周裕锴教授から荣誉证书を贈呈される。



榮譽証書を贈呈されて。左から、楊清瑞・楊春萌・任哨奇・[周裕鍇教授]・李江才・程瑜・劉欽・丁震寰・李鵬飛(周華・張思茗両同学は上掲)

【総括】 17:30—18:00

総括発言は、臨時に周裕鍇教授が行い、その後、徐希平教授が正式の総括を行った。



徐希平教授総括発言

発表を聴いていて自分も大きな啓発を受けた。成功した。10 篇の論文は、全国から応募されたものを厳選した。テキスト論・歴代の受容・校勘についてなど多岐にわたった。どの研究も従来の見解に対して新しい観点を提出している。わかい研究者がしっかり成長していくことを確信した。周裕鍔教授の総括と重複しないように、簡単に問題点を述べる。

- 1、これまでに言及が多ければ、それについては簡潔に記すこと。
- 2、昔は資料が不十分だったが、今は資料が豊富だ。伝統的な文献整理の手法と、豊富な資料・新しい時代の才能とが結合することで、研究は大きく発展する。ネットの資料の扱いについては慎重に。
- 3、論文を書くにあたっては、学術的な規範をしっかり守ること。引用や注釈は正確に。軽々しく先達の見解を否定してはいけない。
- 4、栄誉証書の贈呈は激励の意味で行った。論文に差異はある。しかし、二等・三等といった等級はつけなかった。
- 5、研究方法について注意すべきこと。西方の新しい方法等を導入するのは良いが、課題は明確で、誰もが分かる良識的なものであるべきだ。議論の対象はいったい何なのか、これを徹底的に究明する姿勢を忘れるな。

夜は、陳麻婆豆腐店。二階の「陳興盛飯鋪」で。





ご馳走がどっさり。



白酒「杜甫」。今回の食事で、初めて酒が出た。学会等で、外国人が参加していれば酒を飲んでもよい。



乾杯！

ホテルにもどってから、近くの百貨店へ。1994年に成都に来た時、杜甫草堂でか、武侯祠でかは覚えていないけれど、茶杯を買った。茶杯というよりも、竹の工芸品で、陶器の茶杯の本体と蓋に編んだ竹を貼り付けたもので、手触りよく、なかなか冷めず、長い間ずいぶん重宝した。だんだんと竹が剥がれ、そしていつだったか割れた。ああいうのが欲しいと、百貨店に行ったのだが残念ながらなかった。



仁和春天百貨

その後、また昨夜の商店街へ。ご飯を食べておらず、昨夜見て気になっていたものがあつたので、買いに行った。



瘦肉豌豆方便米饭。熱湯を入れすぎでご飯が軟らかくなった。10 日朝、冷えたのもけっこううまかった。

8月10日（土）

この日は、編輯の劉曉鳳さんが付き添ってくれた。8時に朝食。check out。8時半、博物館の司機（運転手）の車に乗って、8時45分頃、武侯祠に着。



正門前で。劉曉鳳さん。

飛行機は 14:25 起飛。2 時間前とすれば、12 時半には空港に着いているのがいい。劉さん、参観するのにガイドを頼んだ。勤務は 9 時から。9 時少し過ぎたがガイドが来ない。電話で催促する劉さんに「時間がかかる、説明を読めばそれでいい」と言ったが、言うことは聴かれず、ガイドが 9 時過ぎにやってきた。劉さん、「時間のことちゃんとやってある、説明をどこでも速めにしてもらおう」。ま、ガイドはつけば、それだけのことはある。ガイドの発音は極めて明晰で、『三国志演義』の内容かなり覚えているので、要所要所、聴き取れた。

諸葛亮像を初め多くの像があるが、みな後世の製作。写真の向きの調整などやや面倒で、一部だけを挙げておく。



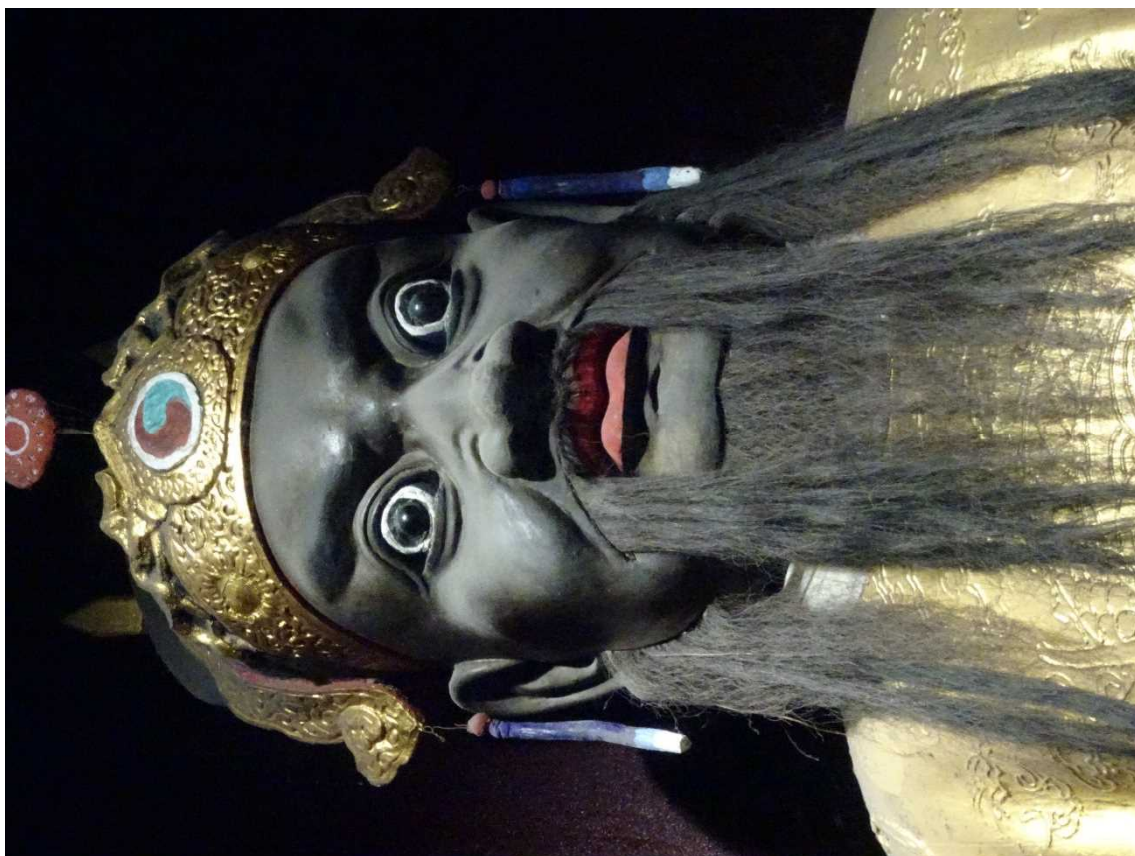
諸葛亮(武侯=忠武侯[諡])



劉備



關羽



張飛の顔。縦にできないけれど、これは迫力なので。

参観の終わりの方、諸葛亮の「前出師表」「後出師表」が掲げられていた。岳飛の書だ。さすが岳飛！金と戦った武勇の將軍らしい雄渾で勢いのある筆致で、感動。



「前出師表」の終わりの部分。岳飛の署名がある。解説しているのは我々のガイド。

武侯祠の参観は1時間ほどで終えた。



出口近くで。劉曉鳳さん。

武侯祠の売店で、編みこんだ竹を貼り付けた茶杯を搜したがなし。商店街にあるので

はと、劉曉鳳さんが連れていってくれたが、どこにもなし。ただし、この古街「錦里」はにぎやかで、色んな店があり、楽しかった。1994年、ここには来ていない。ネットで見ると古い街らしい。司機によれば、夜はもっと賑わうとか。



錦里を出て、武侯祠向かいの土産物店によったが、ここにも欲しい茶杯はなし。劉

さん、まだ捜そうといってくれたが、「算了、真的算了」と強くいって、このことは終了。茶杯で捜したのがまちがいだった。竹細工店に行けば良かったのだ。その機会がまたあるかどうか。



大きな土産物店。

昼食は、武侯祠近くの老字号(しにせ)、飲善斎で。彭燕さんが、会議を終えて駆けつけてくれた。

この店、薬膳料理で有名ならしいが、肉・魚の料理他、何でもある。



飲善齋



麻婆豆腐。陳麻婆豆腐よりもうまかったかも。

昼食は、12 時頃に終了。四人で空港へ。12 時半頃に空港に着いた。その車内で、彭燕さんが説明してくれた。

何年か前から、こういう院生に発表させて批評する会議が、幾つも行われている。四川省だけでも、幾つもある。唐代文学会のような大きな学会ばかりでは、わかい研究者が育たない。××(聞き漏らした)読書会の批評原稿の基準は、1000 字中 800 字は批判にしろ。鍛錬が目的なので。

私が話したことの一部。今回偶然だが、発表の中に白居易と関係するものが、幾つかあった。「杜甫と白居易」という私のテーマは、論壇前日の話としてちょうど良かったかもしれない。院生の発表にはずいぶん啓発された。杜甫についても白居易についても、新しい観点を幾つかもらうことができた。

空港について、すぐに搭乗手続き。カウンターは、40 数号まであったが、大阪行きは、その 1～10 号で処理していた。12 時 50 分頃に、彭燕さん・劉曉鳳さんと、分手。

搭乗口の 18 ゲートには、13 時過ぎに着いた。後、全てほぼ予定通り。14:45 分頃離陸。ただ、17:40(日本時間)頃、乱気流の中に入ってすごく揺れた。これはちょっと怖かった。ノートにメモ、「18 時過ぎ、今も時々、揺れる」。

19 時 8 分、「飛機已經開始下降了」。19:15 鳥取上空を飛行。20 時前、着陸。20 時半、飛行機から降りる。大阪も同じく暑い。ただ湿っぽさは、成都よりまし。10 時半頃、帰宅。